日野啓三作品における《福山》
―記憶と重ねられた風景―

山根繁樹

はじめに

日野啓三は、一九二九年に東京で生まれ、五歳のとき家族とともに朝鮮半島に渡った。敗戦を迎えるまで朝鮮で過ごし、一六歳で引き揚げている。引き揚げ先は、父親の故郷である、広島県福山市駅家町であった。引き揚げたのが一一月、府中市の府中中学校（現府中高校）に転入した後、旧制第一高等学校に進学するため上京した翌年八月までをそこで過ごした。また、一高から東京大学に進む間に、休暇の多くを福山で過ごしている。そして、父母が福山に住み続けたことから、何年かおきに、ときには家族とともに、日野は福山を訪れていた。

日野は、芥川賞受賞作『あの夕陽』[1]前後に、自身をモデルとした私小説的な作品を書いた。それらの作品には、父の故郷《福山》が散見される。また、晩年の自伝的作品『台風の眼』[2]にも、《福山》に触れている部分がある。外国を訪れた体験をもとに書かれた日野の作品は多いが、東京以外の日本の土地が何度も繰り返し登場することは珍しいといわねばならない。

そこで、本稿では、日野啓三作品における《福山》の捉えられ方、《福山》が描かれることで生じる意味作用を探ってみたい。ただし、日野と福山の関わりを形作る基礎が、「父の故郷」である「引き揚げ先」という点にあることは明らかである。したがって、そこに福山の「地域性」と呼ぶべき要素が見いだされるかどうかは心許ない。ただ、いわゆる「根無し草」を自覚していたであろう作家が、「父の故郷」として自らも住んだことのある土地をいかに表象するのかという点には、何らかの意義を見いだすことが出来るかもしれない。

日野の作品において、「場所」は重要である。小説第一作『向う側』[3]以来、一貫して日野は、日常的で拘束的な意味づけを逃れて存在を新たに捉えうる世界を模索し続けた。そのとき、さまざまな「場所」が、いわば《向う側》への通路を予感させる場として登場した。たとえば、『抱擁』[4]における《洋館》、『天窓のあるガレージ』[5]における《ガレージ》、そして『砂丘が動くように』[6]の《砂丘》など、数えあげればきりがない。だが、これらの「場所」はいずれも、存在を拘束する意味づけの力が弱まるところ、存在を実存的に捉え返すべきところとして、作品中に登場している。それに対して《福山》は、「父の故郷」「引き揚げ先」として、存在に日常的で現実的な意味づけを強く迫る「場所」であるといえるだろう。では、日野文学において《福山》は、いかなる形で現れるのか、作品の具体を確認していくことにしよう。

一、引き揚げ先としての《福山》

一九四五年の敗戦を一六歳で迎えた日野は、物心ついてからのほとんどを過ごしてきた朝鮮という土地に対して、親しみの感情だけではなく、疎隔感も抱いていたようである。たとえば、エッセイ「遠い憂愁」[7]において日野は、《朝鮮人が密集して住んでい》た《旧市街》に対して《子供心にはよくわからないままに、強烈に悩ましい憂愁》を感じたといい、それについて次のように述べている。

《いまも私は、その子供心の憂愁の思いの内容を、よく分析できない。だが単に植民者の優越感の裏返しとしての感傷とは言い切れないものがあるような気がする。自分のものではない土地に怯えながら生きねばならなかった者の、土地に根ざして生きる者への憧れだったにちがいない。》

育った朝鮮の土地は、《根ざして生きる》ことのできない土地だった。その疎隔感は、敗戦によっていっそう強まったにちがいない。だが、その土地が日野自身にとって、唯一の居場所であったことも確かである。エッセイ「校旗を焼いた日」[8]には、中学校を兵舎として接収していた日本軍が撤収し、同じ日に米軍が進駐してくるまでの一時間で《あわただしく解校式を行わねばならなかった》経験が綴られている。そのとき日野は、最上級生として、校旗を捧げ持ち焼いたという。

《動物性の臭いに、私は〝生きた何か〟をいまこの手で焼き捨てているのだ、と実感した。それは三年半の間一緒だった級友たち、山の麓の美しい校舎、夏休みに汗を流しながら崖を崩してひろげた校庭、そこで確実に過された私の三年半の日々……そうした具体的なものすべてを一緒にした何かだった。それが消えるのだ。そして二度とここに戻ってはこれないし、再び皆が集まることもないのだ、と私は泣きながら考えた。》

単に住み慣れた土地を離れなければならなくなったのではない。そこは、かけがえのない時間を過ごした土地でありながら、決して《根ざして生きる》ことの許されない土地だったのであり、一六歳の日野は、その土地と永遠に別れねばならなかったのである。このようにして育った土地を離れることになった日野にとっては、あらゆる土地が《根ざして生きる》ことのできない土地となったはずであり、どこにいようとも漂泊者であることを決定づけられたといえるかもしれない。このことは、日野にとっては福山も、決してそこに《根ざして生きる》ことができない土地であったであろうと思わせる。

ここで、《福山》の描かれ方に触れる前に重要なことは、日野の小説においてはまず、引き揚げてきたときの日本の風土、見慣れた朝鮮とは違う風景が、受け入れがたいものとして捉えられていることである。以下、『台風の目』から例を挙げて見ていこう。

《そう、それは気味の悪いことなのだ、あるべからざるところ、たとえば鼻の頭や山の頂に毛や樹が密生している、という光景は。

（略）

樹木だけでなく下草や蔓草も、隙間なく地面を覆い互いに絡み合っている。十一月初めの曇り空の夕暮で、夕靄と海面からの湿気と植物の瘴気が、どんよりとまじり合い溶け合って、一面に陰々とこもっている。小島の輪郭も山々の稜線も、正確に見通せな

い。

京城から貨車で動いたり停まったりしながら丸二日間、釜山の埠頭倉庫で三日間、そして船で半日余、やっとの思いで自分の国に帰り着いたはずなのに、気持ちは滅入っている。

帰ってきた？

いや、送りつけられただけだ、否応なく見知らぬ土地に。》

樹々のない岩山を見慣れた目には、日本の山が異様に映る。癌を患った《私》が、自身の存在の深くを揺さぶられた記憶を《想起》しつつ語っていく『台風の目』において、この引き揚げ時の違和感は、《私》が根ざすべき土地を持たないという自覚を生んだ記憶である。そして、その自覚は、《私》が世界の中でどのように位置づけられるべきか、《私》はいかにして世界と関わっていけばよいのかといった問いを生むことになる。この問いは、『台風の目』の《私》にとどまらず、『向う側』で小説家として出発した日野自身のものでもあったであろう。

引き揚げによる違和感は、《父の郷里》である《福山》に着いても変わることがない。そのときの様子は、『台風の目』では次のように描かれている。

《夜が明けて間もなく、私たちの目的地、広島県の福山市に着く。家族たちのリュックを次々とホームにほうり投げ、まだ寝ぼけている弟妹たちを抱きかかえて降りる。貨物列車はすぐに発って行った。

父の郷里の村までは、さらに奥に行く支線の電車に乗らねばならない。支線のホームに渡る架橋に上がると、福山の街が見渡せた。ほぼ完全に焼けていた。

燃え落ちた屋根の瓦が、至るところに山になっている。そしてその間にとても丈の高い立派な墓石だけが、崩れも傾きもしないで夜明けの薄明りのなかに立ち並んでいる。朝が早すぎて人の姿はほとんど見えない。死者たちだけが健在のような、奇妙な街だ。》

空襲で破壊された《福山》の《奇妙》さは、日野作品に頻出する焼け跡や廃墟への偏愛ともいうべき愛着とは一線を画している。それは、後者が、日野が文学的な目覚めを迎える大学時代に自覚された愛着であるのに対し、前者が、住み慣れた都会としての《京城》を離れ《見知らぬ土地に》《送りつけられた》という情感によって見られていることと関わっていよう。そして、《父の郷里の村》に足を踏み入れようとするとき、《私》の違和感は最も大きくなる。

《窓の外は枯れかけた川岸の葦の茂み、蔓草の絡みついた小山、稲の刈り入れを終ったあとの切株が並ぶ褐色の田のひろがり、朝鮮の農家に比べて丈も高くて角張った農家、流域の両側にだらだらと連なっている低い山並が、確かに見えてはいるのだが、それらの物がかっちりと輪郭を描かない。褐色がかったくすんだ色彩がほとんど宙に浮くようにして、ぼやけ流れてゆくだけだ。

目が覚めきらないからではなく、初めての内地の農村の風景が、私の意識に焦点を結ばないのだ。》

風景を見てはいるのだが、《意識に焦点を結ばない》という状態。それは、それほどまでにその風景が見慣れた朝鮮の風景と異なっていたことを表わしている。そのような状態から《私》の意識が風景を見いだすのに役立ったのが、《文章》であった。

《ところが電車で三十分ほど、駅員が二、三人しかいない小さな

駅で降りて、駅員に教えられた小道を村の方へと歩き始めて間もなく、道端の農家の庭に一本の大きな柿の木があった。葉はほとんど枯れ落ちていて、熟しきった柿の実が二個だけ枝に残っている。昇り始めた朝日の光が、淡い朝靄が立ちこめる村の中で、その柿の実を鮮やかに朱色に照らし出している。

そのとき私の意識のなかに、明瞭に冬近い日本の農村の風景が浮び上がってきた。イメージよりむしろ一連の文章だ。遠い朝鮮の田舎町の小学校で習った国語の教科書にのっていた文章である。

（略）

いままで漂うようだったまわりの風景が、おさまるべき位置におさまって、空間が落ち着くのを感じた。》

朝鮮の小学校で習った《国語の教科書》の文章が、《日本の農村の風景》として、《父の郷里の村》を見いださせる。そのようにして《私》は、引き揚げ先としての《福山》をいわば「再発見」したのである。《見知らぬ土地》と感じた《父の郷里》《福山》は、教科書の文章にあった風景、つまり《日本の農村の風景》として見いだされている。それは、《福山》を、文章から思い描いた《日本》そのものとして定位することである。そして、引き揚げ先である《福山》は、その意味でまさに《見知らぬ土地》《日本》そのものであったといえよう。

二、《福山》の風景と記憶

日野の作品には、父母の住む場所としての《福山》を舞台としたものがいくつかある。ここでそれらを見てみよう。それらの作品に、一つの傾向があると考えられるからである。とりあげるのは、『遺しえぬ言』[9]『遠い陸橋』[10]である。

まず、『遺しえぬ言』では、東京に住む《私》が、妻子を伴って夏休みを《福山》で過ごす。作品冒頭は、上京してきた際《父》が言ったという、次の言葉である。

《「近頃、よく夜中に目がさめてそのまま眠れなくてね。しょうがないから庭に出て立ってるよ」》

一年以上前、この言葉に対して《父》が何を考えるのか知りたいと思った《私》は、帰省に際してあらためて次のような思いを抱く。

《何気なく妻が口にした「遺言」という言葉が、夜更けの庭の父の姿と、そこで父の脳裡に去来するにちがいない思いをきいておきたいという私の気持とを改めて照らし出した。》

このようにして始まる『遺しえぬ言』では、敗戦後ずっと屋敷を守り続けてきた《父》の思いを聞いてみたい《私》が、それでもはっきりと問いかけることのないまま、現在と過去に思いを巡らしていく。《私》は、学生時代には休みごとに帰省していた。その理由は、労働力としての《私》が必要とされていたからである。そして、《私》は、その時期を《これまでに一番つらかった時期》と感じており、その《現場》に立つのが嫌で《十年以上も郷里に戻っていない》のだという。ただし、学生時代の《私》は、ただ黙々と働いたわけではなかった。《父》に対して、次のような言葉を浴びせてもいたのである。

《「あの戦争が負けることは、わかってたはずじゃないか。どうして一年前にでも内地の方に仕事を移しておかなかったのよ。そ

うしたら、いまこんなくだらない苦労をしなくても済んだのに」》だが、この言葉に《父》が答えた記憶はない。そして、《父》は、それがどのような思いを抱えながらなのかは明らかでないが、《くだらない苦労》を続けることで屋敷を守ってきたのである。《私》にとって屋敷と周囲の荒廃は、《父》が年老いたことを端的に示すものといえる。屋敷の管理が十分ではなくなっていることを目の当たりにし、藁屋根もトタンで覆われているのを見た《私》は、次のように感じる。

《崩れるべきものは崩れ、消えるべきものが消えているにもかかわらず、意外に惨めな感じがなかった。むしろ不思議な明るささえ漂っていた。投げやりではないが決して逆らうことなく、父は正確で静かな力のようなものを自然に受け入れているように思われた。

「よくやってると思うよ」

私はことさら明るい口調で声をかけた。

「うん、いつまでやれるかわからんが、できるだけちゃんとしておいてやるよ」

とび石の上を行ったり来たりしながら、父もさり気ない調子で答えたが、父の死んだあと、私も弟妹たちの誰もここに戻ってくる気はないのだ。》

屋敷は、《正確で静かな力のようなもの》によって着実に崩壊へと向かう。年老いた《父》はすでに、それに十分に抗うことはできない。《父》がどのような思いだったのかは明らかでないが、敗戦で引き揚げを余儀なくされてからずっと、《父》にとっては、屋敷を守ることで家族を守ることがすべてだったのではないか。《誰もここに戻ってくる気はない》ことを知ってか知らずか《できるだけちゃんとしておいてやる》と言う《父》は、この土地で生き続けたことの証をこの屋敷の存在そのものに感じているのではないだろうか。

その《父》に向かって《私》は、声にならない問いかけをする。

《視線を吸いこむようなその深く黒い柱を何となく眺めているうちに、ふと、父が間もなく死ぬのだということが、ひどく自然に、すっと私の心の中に入ってきた。

——おとうさんはいま何を考えてるのです。

と私は心の中できいた。》

《私》は、床柱を見ながら《自然に》《父》の死を思い、心の中で問いかける。それは、《父》の人生そのものへの問いかけであるだろう。同じ問いは、この直後、次のような形でも繰り返されている。

《——七十何年かを生きてきて、ぎりぎりのものは何ですか。

私は胸のなかでそっと言った。》

声にならない問いかけに、《父》が答えるはずもない。だが、それが言葉で答えられるようなものではないからこそ、《私》も声にできないのではないだろうか。《つらかった》記憶を捨てるように東京で暮らす《私》とは異なり、《父》は《福山》の屋敷を守り続けた。そのコントラストと、《祖父》以前から《息子》まで連なる繋がりとが、《私》の意識に浮かぶことで、人間の在りようへの問いかけが生まれているのだといえよう。そして、《私》は、《父の郷里》での風景の鮮明さと、東京での風景の曖昧さから、自身の在りようを振り返る。

《雨のあとのせいで大気が澄みきっている。川の上流を遮るように連っている中国山脈の遠い山ひだがはっきりと見えた。河原一

面にころがった石ころのひとつひとつが、かすかに赤味を帯び始めた透明な光のなかに、鋳こまれたように鮮やかだ。

（略）

明日のいまごろはもう東京に着いてるな、と思う。朝から疲れきった空気と濁った陽差のなかで、輪郭の崩れた風景がいつもあそこではあいまいに狎れ合ってくる。いや、自分自身の心のかたちが定まらないから、物も他人も、あいまいにしか見えないのだろう。》

ここにあるとおりだとすれば、この《父の郷里》ではなぜ、風景が鮮明に見えているのか。それは、ここが《父》の生きる場所だからではないか。《父》は、《福山》で生きることを選び続けた。《父》の思いはわからないが、事実として《父》が《福山》で生き続け、屋敷を守り続けたことははっきりしている。そして、《私》が《福山》にいるのは、《父》がいるからである。《ここに戻ってくる気はない》《私》も、《父》がいるから《福山》に来ている。つまり、ここにいる《私》は、《父》の子としての《私》なのであり、その意味で《私》の《心のかたち》も《定ま》っているのではないだろうか。

『遠い陸橋』には、《福山》という名称は出てこない。舞台は、《山陽沿線の父の郷里》で、《新幹線用の高架ホームがほとんど出来上っている》駅である。その駅は、《敗戦の年の秋の末》に降り立った場所でもある。そして、《息子》と二人で東京に戻ろうとする《私》は、見送りに来た《母》にまつわる記憶を重ねながら古い《陸橋》を眺める。現在の《母》は、元気で明るい。だが、以前はそうではなかった。

《敗戦で朝鮮からこの父の郷里に引揚げてから長い間、田舎になじまなかった病気がちの母が、このところ心身ともにすっかり元気そうになったのも、俳句を始めたためにちがいない。（略）

引揚げてから何年もの間の、痩せて、眼ばかり異様に光っていたころの母とは、別人のようだ。》

長らく《父の郷里》になじめなかった《母》の記憶は、空襲で焼け残る以前の《陸橋》の記憶とともに、朝鮮に渡る前のかすかな記憶までさかのぼる。そのとき《母》は、《まだ祖父母の生きていた村の屋敷から、市に買い物に出て来》たまま、東京の実家に戻ったのだった。

《「どこに行くの？　どうして汽車に乗るの？」

妹をひきずるようにしてずんずんと歩いてゆく母のあとを小走りに追いながら、私は幾度も声をかけた。だが、母は思いつめたようにホームを進んでゆく。その後姿の異常な気配と、ひとりでに迫ってくるような黒々とした陸橋の暗く大きな上り口に、私は怯えきった。》

この経験は、《私》の中に強い不安を感じた記憶として残った。そして、これ以降《私が何かに怯えるような事態になるとき》は、必ずこのとき見た光景の《イメージが思い浮ぶ》のだという。そして、《母》の行動に強い不安を感じた記憶は、その当時の屋敷の記憶をも呼び起こす。それは、《父》ではなく《祖父》にまつわる記憶である。

《祖父といっても、父の本当の父ではなくて、父からは叔父に当る。メキシコに渡るんだといって、東京の外国語学校でスペイン語の勉強をしているとき、本当の祖父が急死したため、呼び戻された。そして兄の未亡人と結婚させられ、一生を田舎の地主屋敷に閉じこめられた形になったのだった。》

《祖父》は、次々と土地を手放しては贅沢をする、破滅的な人生を送った。その《祖父》が《私》に、一軒の農家を指しながらそこで《人殺しか首吊り》があったと《囁くように言った》という。そして、《私》は、それを《内心楽しそうに囁く祖父》が恐ろしくて、《母を探してまわった》のであった。《祖父》のふるまいに恐怖を感じ、《母》にすがろうとする《私》は、しかし、その《母》の行動でさらなる不安を刻みつけられることになった。

『遠い陸橋』では、記憶の中の危うい《母》と現在の明るく元気な《母》とを対比させ、不安な記憶をよみがえらせる《私》と家に帰ったとき《ママ》がいるのかと不安がる《息子》とを重ね合わせていく。そのとき、記憶の中の不安や恐怖は、単なる消えた過去ではない。それら不安や恐怖は、自らの存在を庇い守るはずの「母親」が持つ他者性に発しているからであり、《私》も《息子》も、自身の「母親」に謎を感じているといえるからである。《私》は、《母》に次のような疑問を抱いている。

《母は陸橋の全景を目の下に眺めていても何も思い出しはしないのだろうか。

母が忘れきっているのなら、それでいいのだし、忘れた振りをしているだけなのなら、余計きくこともないのだ。》

《父の郷里》にある駅の《陸橋》は、《私》が強い不安を感じると浮かび上がる《イメージ》の源泉である。《私》は、《陸橋》を見ることで、《母》にまつわる不安の記憶をよみがえらせる。つまり、それは、《母》にまつわる不安の記憶が刻印された風景だといえるだろう。

ここまで、『遺しえぬ言』と『遠い陸橋』における《父の郷里》＝《福山》を見てきた。どちらの《私》も、自らを「子」と位置づけている。「父母」が登場するのであるから、当然といえば当然である。だが、そこで見られている風景もまた、「子」であることから見えてくる風景ではないだろうか。つまり、風景が単に眼前の風景として見られているのでなく、《父》や《母》にまつわる記憶と重ねて見られているのである。逆にいえば、日野の作品においては、記憶を離れて、眼前の福山の風景だけが描かれることはないともいえる。《福山》は、常に日野自身を含む誰かの記憶とともに表象されるのであり、その意味では、日野の作品における「場所」の中で特異な位置を占めているのである。そのような《福山》を舞台とした一つの到達として、次節では『孤独なネコは黒い雪の夢をみる』[1]をとりあげ、拙稿のまとめとしたい。

三、重層化する《福山》

『孤独なネコは黒い雪の夢をみる』は、日野が『抱擁』や『天窓のあるガレージ』を書いた後、都市を舞台としたいわゆる「幻想的」な作品を書いていた時期の作品である。《瀬戸内の郷里》に向かう新幹線に乗っている萩五郎が主人公だが、その語りは単純ではない。《私の名は萩五郎。》という冒頭近い一文から、語り手は《私》なのだが、《私は》と《五郎は》が並列的に現れ、《私》と五郎は掛けあいまで始める。一人の人間として設定されている萩五郎だが、人格的には《私》と五郎に分裂して登場しているともいえるだろう。このあたりは、池澤夏樹の「解説」[2]にもあるように、フィリップ・K・ディック

の『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』[13]を意識して書かれたと考えられるこの作品が、日常的なリアリティの範疇に収まらないことを明示する設定といえるかもしれない。

物語は、田舎の屋敷で独り暮らしをしている《父》が病気で倒れ入院していると、入院後一ヶ月して役場から知らせがあり、萩五郎が向かう新幹線の車内から始まる。外は雪が降っている。《瀬戸内の郷里の駅》に着いてみると、そこでも雪が降っていた。急な雪で《父の家》まで行くことができないその夜は、ビジネスホテルに泊まり、翌日、病院へ向かう。対面した《父》は、目がよく見えないのと手脚の自由が利かなくなったため入院していた。一日二回の歩行訓練以外はじっと寝ていて、テレビも観ず、《考えることはもうとっくにみな考えつくした》ために《いまさら考えることなんてない》が、《夢はよくみる》と言う。源平の合戦の夢を見ると言う《父》に、《こんなことを言う父ではなかった》と考えるが、《父》はさらに言う。

《ああ、雪の夢もみた。うんと降った。

それは夢じゃないよ。いまも降ってる。

いや、夢だよ。

強い口調でそう言った。両目とも開いていた。》

また、《父》は、萩五郎の状態を次のように指摘する。

《おまえが何だかぼやけてズレて見える。誰か一緒なのか。

……。》

そしてこの後《父》は、《新聞社で神経ばかりすり減らして》いると、気づいたときには《からっぽの、ばらばらな人間になってしまっている》とも言うのだが、それに対する萩五郎の答えはこうである。

《もうそうなってるんじゃないかな、と五郎が皮肉な調子で囁く。

気持ちのいいことじゃないけど、これがぼくの現実なんだ。おやじにはあの古屋敷がかけがえのない現実であるようにね。そしておやじがあの屋敷を守り続けてきたように、ぼくもぼくの現実から逃げ出すわけにはゆかないんだ。わかってほしいな。

いつのまにか口を開け放しのまま、父は深く眠りこんでいた。》

このやりとりに、萩五郎の分裂状態を読み解く鍵があるのだろう。萩五郎は、すでに一つの円満な人格を維持する存在ではなく、存在のうちに分裂を抱え、それらがせめぎ合うような生を生きているということかもしれない。

この後、《父》が入院して一ヶ月以上誰もいなかった屋敷に入ると、《そこで何してるんだ》という声が聞こえ、もう一人の《新しい五郎》が現れる。《新しい五郎》は、《私》よりも先に屋敷にいて、そこを《私の家だ》と言っている。そして、《私》は、《父》の、《おまえ》が《ここに住むために帰ってくる》夢を見る、という言葉を思い出す。

《私はここに住む。住むために帰って来た。ここが私の郷里だから。

おやじが聞いたら涙を流して喜ぶだろうと思う。まるでおやじの夢の中の私みたいだ。》

そして、《新しい五郎》とやりとりをしながら、なんとか暖を取ろうと屋敷の中を歩きまわるのだが、取り払ったはずの竈があったり、掘り起こして売ったと聞いた五葉松があったりと、《こまやかな部分でこの屋敷には混乱とあいまいさがある》と気付く。それは、《まるで現実そっくりの夢のように》である。《新しい五郎》は、屋敷を守

ってきた《父》の意志をそのままに受け継ごうとする。一方で《私》は、地主制度が消えた後でこの屋敷を守ろうとすること自体が《目をあけて夢をみ続ける》ようなものだと言う。この二人の分裂は、萩五郎がその内部にもつ分裂だとも、《私》の意識と《父》の願う萩五郎との分裂だともいえるだろう。そして、《私》が石油ストーブによやく火をつけ部屋が暖まると、《新しい五郎》の影は薄れていく。

《私》は、《屋敷の中心》にある仏間に、《一応あいさつしておこう》という気になっ》て入る。すると、そこで仏像を眺めあげているうちに、思いがけなく《中心にいる》と感じる。

《屋敷の中心ということだけでなく自分自身の中心に。幾重にもずれ、ぼやけ、切れ目だらけの自分が、虚空の一点にひっそりと濃縮してくるような感覚だった。金色の不透明な輝きを放つ仏像が、濃縮する虚空そのもののように見える。その濃密な幻影のような感触が私の内感を触発し、そして仏像はそんな私の投影であった。》

この後、周囲のすべてが薄れて消え、《仏像である私、私である仏像》だけが残る。ここでは、いくつにも分裂する萩五郎の中心にある空虚さが、その空虚さのままに感受され、肯定されているといえる。

次に現れるのが、ネコである。この屋敷には、《代々一匹のめすネコが棲みつき続けてきた》のだという。《私》はそのネコに弁当を分け与える。湯を沸かすため雪を掬おうと外に出ると、ネコもまたついてくる。《私》は、雪の上に膝をつき、ネコと目をのぞき合う。《私》は、ネコの目から見れば屋敷が《巨大な迷路》であることを意識するが、その《巨大な迷路》の中に取り残されたネコについて、次のような《感触》がやってくる。

《その中に、ある日から突然自分だけになったネコの恐怖感が、私の意識の中にじわじわとしみこんできた。感情ではなく感触だった。皮を剥いだヘビを握ったら感ずるにちがいないような、ぞっとする感触だ。》

ネコの孤独と恐怖が、《感触》として《私》にわかる。それは、次のような認識をもたらす。

《何らかの形をとって存在するものに逃れられぬ恐怖。その恐怖の質において、私はネコ以上に保証されている存在では決してなかった。

そうだったのか、そうだったんだな、そういうことなんだよ。》

ネコもまた、存在するがゆえの恐怖を抱くのだと《感触》したとき、それは人間である自身の恐怖と質において違いがないのだ、という認識がやってくる。その認識は、孤独や恐怖が存在そのものの条件であるということを意味しているだろう。このようにして《私》は、《まるで現実そっくりの夢》のような屋敷で、自身の存在の奥深くを実感したのであった。そして、この夜は、次のような疑問を残して終わる。

《ネコを起こさないようにそっと立ち上がると、電灯とストーブの火を消して冷たい布団にもぐりこんだ。

本当は、それほどいろんなものはいらないんだよなあ、どこにいたって、何していたって。目を閉じながら心の中で言った。

それにしても、この思いがけない意識の励起状態をもたらしたエネルギーはどこからきたのだろう。》

翌朝、病院から《父》の様態が悪いと電話がかかる。《父》を見舞

ったその夜に、《父》の屋敷で存在の奥深くを実感し、その《エネルギーはどこからきた》のかと考えた翌朝、《父》の意識は弱まった。そのとき《私》は、《まさか、この雪は……》と呟き、五郎は、《おれたちはおやじの夢の雪の中を、歩きまわっているんだ》と断定する。病院へ行こうと玄関を開けると、雪は完全に消えている。

《昨夜、雪が隠していたものが悉くあらわになっていた。門の屋根瓦は青灰色の苔に覆われてずり落ちかけていた。戸は隙間だらけで端の方は腐りきってなくなっていた。父が剪定できなくなった庭木は、どれも勝手に余分の枝を伸ばして醜く絡み合っている。

（略）

まさにこれはおやじが他人に見せたくない、何よりおやじ自身が見たくない光景だな、それだから雪の夢を……と五郎が言いかけた。

私は首を振ってその先を押しとどめた。それ以上言葉にしてほしくなかった。

あれがおやじの最後の力だったんだ、とだけ私は言った。》

ここで、作品冒頭から降っていた雪は、《父》が夢の中で見ている雪だったことが明らかになる。《父》の夢の中でもあったから、ないはずのものがあったり、《新しい五郎》が屋敷を守るために戻ってきたりしていたわけである。そして、現実と夢が重ね合わされた《瀬戸内の郷里》、《父》の守ってきた屋敷で、《私》は自身の存在の奥深くを実感したのであった。『孤独なネコは黒い雪の夢をみる』においては、《私》の外に広がる世界が、《父》の内なる世界でもある。それは、前節で見た、記憶とともに表象される《福山》から一歩踏み込み、《父》という、日野にとって最も《福山》と繋がった人物の内なる世界と、《瀬戸内の郷里》としての外なる世界《福山》とを、重ね合わせる試みだったといえる。

日野啓三にとって福山は、自分の父母や自身の歴史に関わる、特別な固有名を持った土地だったのであろう。だからこそ、そこを舞台とするとき小説は、存在の深い根に触れて交わった人々の記憶や影を呼び寄せ、《福山》の風景とともにそれらを捉えようとするのではないだろうか。

注

（1）「新潮」一九七四年九月。『あの夕陽』（一九七五年三月、新潮社）所収。

（2）「新潮」一九九一年七月～一九九三年三月。一九九三年七月、新潮社より刊行、引用は同書に拠る。

（3）「審美」二号、一九六六年三月。一九八八年二月、成瀬書房より特装限定版として刊行。この作品については、拙稿「日野啓三『向う側』論―言葉の外部へ向かう試み―」（「近代文学試論」第三一号、一九九三年一二月）をご参照いただければ幸甚である。

（4）「すばる」一九八一年一、三、五、七、九月。一九八二年二月、集英社より刊行。この作品については、拙稿「日野啓三『抱擁』試論 ―《向こう側》の世界―」（「国文学攷」第一四四号、一九九四年一二月）をご参照いただければ幸甚である。

（5）「海燕」一九八二年一月号。『天窓のあるガレージ』（一九八二年五月、福武書店）所収。この作品については、拙稿「《少年》という可能性―日野啓三『天窓のあるガレージ』論―」（「国語教育論叢」第一四号、二〇

〇五年三月）をご参照いただければ幸甚である。

（6）「中央公論」一九八五年一～一二月。一九八六年四月、中央公論社より刊行。この作品については、拙稿「日野啓三『砂丘が動くように』論―一九八〇年代文学の考察に向けて―」（「近代文学試論」第四〇号、二〇〇二年一二月）をご参照頂ければ幸甚である。

（7）「東京新聞」一九七四年七月二二日夕刊。『私のなかの他人』（一九七五年七月、文藝春秋社）所収、引用は同書に拠る。

（8）「群像」一九七四年九月。『私のなかの他人』（前注7参照）所収、引用は同書に拠る。

（9）季刊「藝術」一九七三年春季・二五号。『此岸の家』（一九七四年八月、河出書房新社）所収、引用は同書に拠る。

（10）「海」一九七四年八月。『あの夕陽』（前注1参照）所収、引用は同書に拠る。

（11）「新潮」一九八四年九月。『夢を走る』（一九八四年一一月、中央公論社）所収。引用は、中公文庫版『夢を走る』（一九八七年四月、中央公論社）に拠る。

（12）中公文庫版『夢を走る』（前注11参照）。

（13）フィリップ・K・ディック（浅倉久志訳）『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』（一九七七年三月、ハヤカワ文庫）。

（やまね　しげき、松江工業高等専門学校）